

令和 5 年度

学校・家庭・地域連携支援事業報告書

《モデル校》

教育事務所	市町村	学校名	学校長氏名
水 戸	笠間市	笠間市立岩間第三小学校	佐々木 英治
県 北	日立市	日立市立大みか小学校	松崎 善則
鹿 行	神栖市	神栖市立深芝小学校	横山 英幹
県 南	土浦市	土浦市立右廻小学校	中山 弘
県 西	下妻市	下妻市立高道祖小学校	野村 隆

《実践研究テーマ》

学校名	テーマ
笠間市立岩間第三小学校	民家体験を通して、「地域を知り」「人とふれあう魅力を感じ」「起業家精神を養う」
日立市立大みか小学校	日立みらいイノベータープログラム「理想の学校作り」
神栖市立深芝小学校	深芝プロジェクト「元気に やさしく かしこい子」 ～学校・家庭・地域との連携による取組を通して～
土浦市立右廻小学校	「学校・家庭・地域の協働により、子どもが夢と希望をもち、 生き活きと育つ学校作りを推進する」
下妻市立高道祖小学校	児童スローガン（ た か さい ）の達成 「た 楽しく学ぼう か 感動体験をしよう さい 最高の思 い出をつくろう」

茨城県教育委員会

令和5年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（ 笠間市立岩間第三小学校 ）

1 学校全体としての取組

本校の教育目標「たくましい心身と創造性を備えた人間性豊かな児童の育成～起業家を育てる岩間三小～」を目指し、学校・家庭・地域が連携・協働し、三位一体で児童を育成するため、「総合的な学習の時間」において、『地域を知り、人とふれあう魅力を感じ、起業家精神を養う』学習を実施した。

第3学年は、NPO法人「笠間の魅力発信隊」と連携・協働し、10月に民家体験学習を実施した。第6学年は、NPO法人「ひと・まちねっとわーく」と連携・協働し、9月に水戸市内体験学習を実施した。

受け入れ先や訪問施設は多岐にわたったが、児童の興味・関心を元に、友達と協働して、課題解決的な探究型学習を実践した。

2 家庭・地域等との連携の工夫点

第3学年は、NPO法人「笠間の魅力発信隊」の協力を得て、13件の民家体験学習を実施した。受け入れ先の民家の職業は、農家、大工業、陶芸家、呉服店、古民家カフェ、ボルダリング体験、ビオトープ、BMX体験等、多岐にわたった。児童は、グループごとにそれぞれの民家で1日を過ごし、職業体験を行い、地域の方とふれあう体験を通して、個別の課題解決型学習を行った。



開校式の様子
(3学年児童、民家、学習支援ボランティア)



農家で収穫の体験



大工さんとカンナ掛け
体験



古民家カフェで、接客とハーブ
ティー作りに挑戦



昆虫観察と里山整備・ビオト
ープの体験



岩場見学とボルダリング
体験

第6学年は、NPO法人「ひと・まちねっとわーく」と連携・協働し、水戸市内にある

施設や企業を訪ね、水戸市内体験学習を行った。弘道館や水戸東武館、偕楽園、常磐神社、六地藏寺、県立図書館、水戸地方裁判所、納豆販売店等、16件の施設からグループごとに訪問先を選択し、主体的にめあてや計画、約束等を話し合った。児童は施設を訪問したり現地の方や自然と触れ合ったりすることで、茨城県について知り、自分で考え行動する力が身に付いた。また、目的地までの電車、バスの交通手段も計画し、公共のマナーや自然愛護について学ぶことができた。



3 事業の成果と課題

【成果】

- ・児童が、主体的に課題を発見し、課題を解決するために体験学習を行い、体験を振り返りまとめ、他者へ発信し、民家や施設への礼状作成を行う活動を通して、友達と協働して課題を解決する力が身に付いた。児童は、地域の人とのふれあいを通して、地域の職業や地域の良さを知り、郷土愛や自然への畏敬の念が育まれた。また体験学習を通して、人とふれあう魅力を感じ、起業家に必要とされる、チャレンジ精神、創造性、探求心等の精神と、情報収集・分析力、判断力、実行力、コミュニケーション力、リーダーシップ等の資質・能力の育成が図れた。
- ・保護者や学校運営協議会委員から学習支援ボランティアを募り、学校と家庭（保護者）、地域（事業所・学校運営協議会）の三者で連携・協働して行ったため、安心して安全に実施することができた。

【課題】

- ・体験学習に協力を得られる民家や施設、企業を選定し、日程等の調整を進めることは、学校だけでは不十分であり、困難であった。NPO法人と連携・協働することで、事業所の幅が広がり、より有意義な体験学習が実施できた。今後も、関係機関と連携・協働し、児童の主体的・対話的で深い学びの実践を継続していきたい。

令和5年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（ 日立市立大みか小学校 ）

1 学校全体としての取組

(1) 日立みらいイノベータープログラム「理想の学校づくり」

① 事業のねらい

これからの理工系人材に求められる資質（探究心、主体性、チャレンジ精神、創造性）と能力（問題発見・課題解決力）を、未来をイノベートする力と定義し、これらの力の育成を目指す。児童の設定課題に対し、日立財団・日立製作所大みか工場の講師からアドバイスを受ける。学びのサポートを得、児童の学習意欲向上とより充実した学びにつなげる。

② 内容と計画

- ・フェーズ1 学校をよりよく変えるための必要なスキルトレーニング（6回）
- ・フェーズ2 スキルを活かし、「理想の学校」をテーマに探究学習（8回）
※内4回出張授業

第1回出張授業 動機付け

日立製作所のイノベーション事例の紹介と実験とワーク「沈む、沈まない、違いは何」を行い、仮説を立て確かめる練習を実施した。



第2～4回出張授業 課題設定と中間発表、最終発表

講師と共に仮説の検証方法を立案、課題の解決策をまとめ発表し助言を得た。



調査整理分析を実施し、中間発表を経て、最終発表を実施した。



(2) その他

①5・6年「茨城キリスト教大学学部生との英語科授業」

週1回外国語の学習で、担任とALTの授業の中で、学生が学習内容に合わせた発展的なアクティビティーを用意し、学習活動を展開している。年齢の近い大学生と接することにより、外国語の習得の意欲の向上や、自らの将来を考えるきっかけともなっている。



②1年「どんぐり拾い」

生活科の学習で、日立製作所大みか工場へ出向き、校内には無いどんぐり拾いをした。交通に注意した道路の歩き方や構内で出会った方々へのあいさつの仕方等を学ぶことができた。



③全校児童と保護者「奉仕作業」

ロングの昼休みに、花壇の手入れや夏花壇に向けた種まき、体育倉庫等の片付けなどを、児童、教職員、PTAとともに分担し緑のある環境での学びを行った。



2 家庭・地域等との連携の工夫点

学習教材に恵まれた教育環境

日立みらいイノベータープログラムを2年間継続実施した結果、児童の主体性が発揮されている。また、学区内に日立製作所大みか工場、茨城キリスト教大学があり、学校の敷地内に大みか交流センターが隣接している。そのため、地域学校協働活動推進員等の働きかけにより各学年の学習活動や学校活動が彩りある、充実したものとなっている。

3 事業の成果と課題

【成果】

- 日立みらいイノベータープログラムでは、レベル確認一覧表とレーダーチャートによる自己評価から、7つのkeyスキルが、フェーズ1終了時には開始時比0.5ポイント、フェーズ2終了時にはさらに0.5ポイント上昇した。この結果から日立財団・日立製作所大みか工場の講師の方々と共に、児童同士が協力し、イノベーターとしての資質と能力を身につけることができたと考える。
- 理想の学校づくりに向け、各グループが設定した課題に対して、試行錯誤しながら協働して取り組むことができた。

【課題】

- 問題発見、仮説と計画の立案、情報収集、仮説検証、整理分析、創造という一連の流れを体験した。このサイクルを実行し、理想の学校実現に向け、新年度以降身につけた資質能力を活かしていく。

令和5年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（ 神栖市立深芝小学校 ）

1 学校全体としての取組

本校の教育目標「心豊かでたくましく自ら学び自ら考え実践できる児童を育てる」を目指すためには、学校・家庭・地域の連携が非常に重要である。保護者や地域の方々と様々な場面で関わりをもち協働することを通して、子供が安心して学校生活を送ることができる環境を整備していくこと、児童が多くの人との関わりの中で豊かな心を育成していくことをねらいとして、以下の活動に取り組んだ。

- (1) P T Aを軸とした家庭との連携
- (2) 保幼小中連携
- (3) 地域や外部講師との連携

2 家庭・地域等との連携の工夫点

- (1) P T Aを軸とした家庭との連携 → P T A担当や学年主任が主となり、役員との打合せを行った。

- ①学年委員主催の親子奉仕作業（年2回）
- ②あいさつ運動（年4回）
- ③保護者ボランティアによる学習支援
 - ・2年：町探検引率、5年：福祉体験支援、校内持久走大会立哨等、保護者ボランティアを募り、計画的に学習支援を依頼した。
- ④親子ふれあい活動
 - ・4年ぶりに復活した活動となった。1年：「メッセージの木」作成、2年：ドッジボール、リレー、3年：クラスの旗作り、4年：合唱披露、親子ドッジボール、子供から家族へお手紙を渡す、5年：ミニ運動会（綱引き、親子二人三脚など）、6年：親子ヨガなど、どの学年も趣向を凝らした活動となり、親子で楽しい時間を過ごすことができた。



③2年：町探検引率



③5年：福祉体験支援



④4年：親子ドッジボール



④6年：親子ヨガ

- (2) 保幼小中連携 → 教務主任、保幼小コーディネーター、特別支援教育コーディネーター、保健主事、養護教諭等が中心となり、連絡調整、情報交換を丁寧に行った。

- ①授業参観：保育園や幼稚園の先生が小学校の授業を見に来たり、小・中学校間での相互授業参観を実施したりした。
行動観察：保育園、幼稚園へ本校職員が出向き、入学予定園児の様子を観察してきた。
 - ・異校種間の職員同士で情報交換など連携を図ることで、幼児教育と小学校教育、中学校教育の円滑な接続に努めた。
- ②小中連絡協議会、神栖第二中学校区小中合同学校保健安全委員会の実施
 - ・小中合同学校保健安全委員会では、講師に管理栄養士の田口まみ先生を招き、「おなか元気教室“腸”元気で伸びる子どもは体内時計と時間栄養学で決まる！」という演題で講演をいただいた。
- ③保育園、幼稚園児と小学1年生との交流活動
 - ・平泉幼稚園、深芝保育園の園児たちが来校し、1年生の児童と学校探検などをして交流を図った。

④中学生ボランティア（運動会）

- ・ 小学校の運動会に中学生がボランティアで参加。係の仕事などを手伝ってもらう。

(3) 地域や外部講師との連携 → 教頭、教務主任、保健主事、学年主任等が窓口となり、計画、準備、連絡調整等綿密に行った。

①親父の会、PTA本部、ふかふかクラブ（深芝小PTA0B・0G）、地域の方の協力による「6年生お楽しみ会」

- ・ 夏休み、深芝小体育館で1泊2日のお楽しみ会を実施した。ゲーム「逃走中」、避難所体験（段ボールハウス作り）、肝試し（夜の学校巡り）などが行われた。夕飯に非常食用ドライカレーを試食し、段ボールハウスで就寝した。

②高齢者との交流

- ・ 社会福祉協議会に依頼し、神栖長寿会、筒井長楽会、深芝長寿会の方々29名が来校。1年生が生活科「昔遊び」の学習で、こま回しや紙ひこうき飛ばし、お手玉、けん玉などの遊び方を長寿会の方から教えていただく。最後は、お互いに名残惜しくなり、いつまでも手を振り合っている様子が見られ、親睦が深まった。

③地域ボランティアによる交通安全見守り隊

- ・ 令和4年12月、深芝地区懇談会を実施。学校評議員、PTA役員、ふかふかクラブ（深芝小PTA0B・0G）の方たちに集まっていただき、「交通安全見守り隊」について協議。地域の方々に回覧板で募集のチラシを配布し、令和5年1月より活動を開始している。



① 6年:お楽しみ会



②1年:高齢者との交流



② 1年:高齢者との交流



③「交通安全見守り隊」による朝の見守り



3 事業の成果と課題

【成果】

- ・ 横断旗を一家庭に一本配付し立哨の協力を呼びかけたり、「できる人ができるときにできることを」を合言葉に「交通安全見守り隊」を地域住民にも募集し、登録された方には腕章や横断旗を配付し活動いただいたりと、家庭だけでなく地域にも協力の輪を広げ、子供の安全をみんなで守るという体制を作ることができた。
- ・ コロナウィルス感染症が5類に移行され、学校での教育活動やPTA活動も活動の範囲を広げ活発に交流が行われるようになった。運動会には、交通安全見守り隊に登録された地域の方を招待し、児童の活躍する姿を見ていただいた。地域の方の中には、「子供たちからパワーをもらうのよ。」と言って、涙ながらに児童の頑張っている姿を見ている人もいた。このような取組を通して、保護者同士や地域の方とつながる機会が増えた。

【課題】

- ・ 交通安全見守り隊については、まだ始まって1年余りの取組である。今後継続していくこと、さらに輪を広げていくことが必要である。
- ・ 来年度から、学校運営協議会が発足される。今年度の取組を生かし、学校・家庭・地域が連携し、本校の学校運営協議会の基盤を築いていきたい。

令和5年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（ 土浦市立右小小学校 ）

1 学校全体としての取組

（1）地域との連携

- ・芝生グラウンドの維持管理をしてくれる地域ボランティア団体と児童との交流活動については、茨城新聞「学校紹介新聞」（令和5年8月2日付）紙面で、児童作文により地域ボランティア団体の活動を紹介した（写真1）。また、6年生児童が「感謝のメッセージ動画」を作成し、学校からのメールにて動画を配信し、感謝の意を表した。
- ・スクールボランティア団体の運営の更なる充実に関しては、自校で「スクールボランティアスタッフ募集」のリーフレット（写真2）を作成した。これを保護者全員に配付したり、地域に回覧して広く募集を呼びかけたりした。令和6年1月末日現在20名が登録している。具体的な活動として、家庭科の調理・裁縫の実習やクラブ活動のゲストティーチャーや補助役、また、低学年の校外学習の引率サポート（写真3）として活動していた。



写真2 「スクールボランティアスタッフ募集」のリーフレット



写真1 茨城新聞の記事



写真3 校外学習 第2学年町たんけん

（2）家庭との連携

- ・1学期の期末授業参観に、地域の有識者にアドバイザーとして参加してもらい、子育て懇談会を実施した。
- ・2学期の期末授業参観日にPTA主催の学校行事「スーパー右小ブラザーズ」を行い、保護者と児童のふれあいの場を設定した。
- ・月1回程度の教育活動の動画配信を通して活動促進の充実を図った。

2 家庭・地域等との連携の工夫点

(1) 地域との連携

- ・動画により学校の様子を地域に発信するなどのICTの効果的な活用
- ・スクールボランティア団体の運営の更なる充実やスタッフ確保のため、自校で作成した「スクールボランティアスタッフ募集」のリーフレットがより多くの人へ周知されるための地域の回覧板の活用や公民館への配置などの手立ての工夫

(2) 家庭との連携

- ・地域の有識者を招聘した子育て懇談会を開催することで、保護者主体の懇談会を行い積極的に情報を発信し、悩みを共有することができる場を複数回設定
- ・PTA主催の学校行事の実施による、保護者と児童のふれあいの場を複数回設定
- ・親子のつどいを計画し、低学年は地域のスポーツインストラクターを講師に招き親子でダンスを実施(写真4)
- ・既存の読み聞かせボランティア(写真5)の拡充及び活動内容の発展



写真4 親子でダンス



写真5 読み聞かせボランティア

3 事業の成果と課題

【成果】

- 学校評価アンケートによる保護者の回答では「我が子は楽しく通っている」に対する肯定的回答97%であった。また、児童のアンケートでは肯定的回答93%であった。このことから、家庭・地域と連携することは、児童や保護者にとって安心・安全な学校づくりにつながると考えられる。

【課題】

- 学校評価アンケートによる児童の回答では「右廻小学校は、土浦で一番の学校だと思う」に対する肯定的な回答が92%であった。これに対する学校運営協議会委員の意見として、「学校に自信を持つことは大切である。何をもって一番の学校なのかを読み取り、それを明確にし、発信することも必要である。児童・保護者が土浦で一番であると思うことの理由を、理解・意識することで、さらに評価を高めていくことになる。一番となる理由を学校の強みとして捉え、そのことを推進することは、学校運営の基軸となる。」との意見を承った。学校としてのSWOT分析を行い、学校・家庭・地域の連携の取組に関するPDCAサイクルを続けていくことで、更に学校運営を充実させることが今後の課題として挙げられる。

令和5年度学校・家庭・地域連携支援事業報告書

学校名（下妻市立高道祖小学校）

1 学校全体としての取組

- 1 高道祖小学校人材バンクの構築及び授業実践
- 2 高道祖地区の特色を生かした教育活動の展開
(高道祖七不思議・フジバカマ・歩く会)
- 3 地域の方々の協力による体験活動の充実
(米作り、さつまいもづくり、焼き芋フェスティバル)
- 4 中学年、高学年による体験活動を生かしたキャリア教育の展開
(4年生、5年生による米販売、6年生によるさつまいも販売)
- 5 地域にとともにある学校づくりのPR

2 家庭・地域等との連携の工夫点

1 高道祖小学校人材バンクづくりと授業実践

(1) 地域人材バンクを構築

教職員の授業支援のニーズを把握した上で、地域コーディネーターや下妻市民の会高道祖支部の協力を得て、人材登録の要請を行った。その結果、主に農業分野の支援、裁縫支援、防災教育、戦争体験の講話、高道祖七不思議伝説講話、登下校の見守り等での協力を得られる人材が現在1名の登録をいただいた。

(2) 下妻市民の会高道祖支部と連携した授業実践

① 5年生家庭科授業支援（エプロンづくり）

人材バンク登録者に依頼し、第5学年「エプロンづくり」において裁縫支援を行った。2日間にわたり、5名の方にミシンの操作補助を担当と共に行っていただいた。一人一人の児童への支援がきめ細かく行われたことで、児童も楽しく製作し、ミシンの操作にも慣れエプロンを仕上げることができた。



② 4年生社会科（水の浄化実験）

社会科の浄水場見学の補充深化の学習として県環境アドバイザー事業とも連携し、「水の浄化実験」を行った。浄水場見学で学習した内容を、本校学校運営協議会委員の方に協力をいただき、水がどのように飲み水になるのかを一人一人が実際に実験を行い、実感をとまなう理解をすることができた。



2 高道祖地区の特色を生かした教育活動

(1) 地域の伝説「高道祖七不思議」について

第3学年総合的な学習の時間において、地域の伝説「高道祖七不思議」についての学習を行った。児童と保護者が一緒に地域に残る伝説について学習した。講師として本校学校運営協議会委員の方に協力をいただき講話をしていただいた。地域の伝説を語り継ぐ意味を理解し、地域への愛着を育てる学習となった。



(2) 絶滅危惧種「フジバカマ」について

第5学年、第6学年の総合的な学習の時間において、高道祖地域に残る絶滅危惧種「フジバカマ」についての学習を行った。かつて、本校の地区内を流れる小貝川にフジバカマの群生地があった。しかし、現在は群生地にもわずかに残る程度である。そこで、フジバカマの保護について本校学校運営協議会委員の方に講話をしていただいた。今後の保護活動への取組について方向性を見い出すことができた。



(3) 下妻市民の会高道祖支部との連携

毎年、市民の会高道祖支部と連携して「歩く会」を実施している。歩く会のコースとして、隔年で地区内を巡る「高道祖七不思議をコース」「フジバカマコース」を歩いている。地域の特色である2つのコースを実際に歩くことで、学習の内容を補完し、地域への理解と愛着を深める機会となっている。



3 地域ボランティアの協力による体験活動の充実

(1) 学校田、学校畑の管理

米づくり（4年生、5年生）、さつまいもづくり（全学年）

本校では、長年、農業支援をいただいているボランティアの方の協力を得て米づくり、さつまいもづくりを行っている。ボランティアの方々に田植えや稲刈り、さつまいもの収穫の指導等をいただくとともに、日常の管理を定期的に行っていただいた。



(2) 焼き芋フェスティバルの開催

学校で収穫したさつまいもを使って、焼き芋フェスティバルを行った。事前準備を学校環境整備委員、保護者に依頼して行った。



4 体験活動を生かした、キャリア教育の推進

○ チャレンジショップの企画・運営の実施

今年度からの取組として、11月の歩く会当日に4年生から6年生がチャレンジショップを運営した。4年生・5年生は学校田で収穫した米を販売した。6年生は学校畑で収穫したさつまいもとさつまいものつるで製作したクリスマスリースを販売した。児童が宣伝用ポスターを制作し、郵便局や保育園にも掲示するための交渉等を児童自身が行った。また保護者や地域の方への販売も児童が行った。



5 地域にとともにある学校づくりの広報

(1) 高道祖小学校コミュニティスクールだよりの発行

学校運営協議会の実施状況、人材バンクを生かした授業支援の様子を「コミュニティスクールだより」として発行し、高道祖市民センターへ配付して学校の教育活動の様子を広報した。

(2) がん教育講演会の地域への公開

11月に5年生、6年生向けにがん教育講演会を実施した。案内文を保護者及び高道祖市民センターへ配付し、地域の方にも御参加いただけるようにした。

3 事業の成果と課題

【成果】

- ・ 地域の人材を有効活用し、体験活動を実施したことで学校評価からも児童の学習への意欲の高まりが見られる。
- ・ 人材バンクを活用した授業を展開したことで、社会科や理科、家庭科、総合的な学習等において学習の補充深化を図ることができた。
- ・ 高道祖七不思議とフジバカマの保護に特化し、地域の特色を生かした教育活動を展開する土台ができた。

【課題】

- ・ 多くの地域人材の方に御協力をいただいているが、授業に関わる資料代や旅費の捻出等の財源がない。
- ・ 多くの方に学校への支援をいただくため、児童、教職員の個人情報等の管理、配慮には十分な注意が必要である。
- ・ 本校の人材バンクでは対応の難しい学習支援があり、ニーズに対応できない場合が考えられる。市内での人材の情報を共有し、活用することができる仕組みの構築が必要である。
- ・ 今後は授業支援も含め、多様な人材を募集することで人材バンクの充実を図る。
- ・ 教育の質を落とさず、教職員の働き方改革の取組の理解と協力の要請を今後も継続して行う。